

〔花の美、石の美、庭園の美展によせて〕

愛石文化と奇石図—中国から日本へ—

中国には古くから、姿や色の美しい奇石を庭園や書齋に飾って、愛玩する文化がありました。宮廷庭園の一角を思わせる、伝毛益筆「蜀葵遊猫図」「萱草遊狗図」(大和文華館蔵)☆、あるいは文人が自身や知人の庭園を描いた、高鳳翰(1683-1749)筆「草堂芸菊図」(1727年、大阪市立美術館蔵)☆、銭杜(1761?-1844?)筆「虞山草堂步月詩意図」(1813年、同前)☆には、珍しい形や文様の石が登場します。奇石は庭園や花鳥を描く際にモチーフの1つとして添えられるだけでなく、主役として単独で絵画化されることもあります。本稿では、本陳作品を中心に、中国から日本へと広がっていく愛石文化と奇石図の制作について紹介したいと思います(出陳作品には☆印を付けています)。

中国の明代末期は、文人の趣味生活に関する商品や情報があふれ、それを楽しむ階層も広がった時代です。愛石趣味についても同様の現象が見られますが、この時期に作られた奇石図の作例として、張爾葆筆「芙蓉石四面図巻」(1622年、京都国立博物館蔵、図1)☆が挙げられます。芙蓉石は、もとは南宋の宮殿徳寿宮の庭であったと言う杭州の官署内に置かれていた名石です。1621年、杭州に赴任していた楊師孔(1570-1630)は、紹興の画

家張爾葆にこの石の東西南北四面を描かせ、自ら10首の詩を題し、さらに同好の文人たちに詠詩を依頼しました。その中には有名な愛石家米万鍾(1570-1628)も含まれています。滑らかな石肌が美しい北面・東面、複雑に隆起する形が面白い南面・西面など、角度によって変化する石の表情と、当時の鑑賞のあり方を追体験できる作品です。

日本でも鎌倉時代には盆石が鑑賞されていたことが知られていますが、17世紀後半に来日した黄檗僧たちの営みは、最新の中国文人趣味を伝え、日本の愛石文化にも新たな刺激を与えた点で注目されます。例えば、福建の人で1654年来日した独湛性瑩(1628-1706)の「太湖石図」(個人蔵)には、明清の文人たちの好む奇怪な形の石が墨痕豊かに描かれていますし、独湛の日本人弟子が、木庵性瑄(1611-84)に贈ったという「武夷石」(明楽寺蔵)☆が、隠元隆琦(1592-1673)を始めとする25名の黄檗僧の詠詩書卷(1670-71年、同前、図2)☆と共に伝わっています。

では中国文人文化に熱い視線を向けていた日本の南画家たちはどのように石を描いたのでしょうか。ここでは与謝蕪村(1716-88)と田能村竹田(1777-1835)を取り上げます。蕪村の奇石図としては、「岩図屏風」(逸翁美術館蔵)や「寿石図屏風」(1783年、個人蔵)、あるいは藍瑛(1585-1664)の奇石図に倣った「三拳石図」(個人蔵)などが図録等で紹

介されています。興味深いのは、蕪村が中国の愛石文化の歴史を意識しつつ、何の変哲もない石が風雨にさらされている様子にも感興を覚えていた点です。奇石図のパロディのような俳画「遊行柳自画賛」(逸翁美術館蔵)では、旅先で見た遊行柳(栃木県)のもとに散らばる小石を無背景の中に描いています。このような蕪村の美意識は、「蘭石図屏風」(大和文華館蔵、図3)☆に見られる、風に吹かれて野原を転がっているかのような動きのある石の描写にも反映されているのかもしれません。

野外の空気を感じさせる蕪村画に対して、室内での楽しみを伝えるのが、竹田筆「翰墨隨身帖」(大和文華館蔵)☆です。「錦川石図」(図4)の自跋で「まだこの石は実見したことがないが、胡日從(正言)に倣って描いてみた」と明言しており、この画帖中の石図には胡正言(1584-1674)編『十竹斎書画譜 石譜』の影響が濃厚です。竹田は滲むような多色刷の美しい『十竹斎書画譜』を書齋に置き、まだ見ぬ中国の奇石を想像して楽しんでいただいていたのでしょうか。「翰墨隨身帖」にはまた、壇ノ浦で拾った姿の良い石に、卓上で飾るための台座を付けた様子(図5)も描かれています。

明清の文人文化への憧れと一体になった奇石愛好熱は明治以降も持続します。明治期に盛んに出版された煎茶図録の一つ、熊谷直孝(1817-75)追善の会の記録である「円山勝会図録」(1876年、個人蔵、図6)☆には、直孝遺愛の品として、紫檀の台座を付けた奇石が紹介され、煎茶会の装飾として明清文人書画と共に奇石を用いる様子が描かれています。同種の太湖石数点☆が泉屋博古館に所蔵されています。これは住友春翠(1865-1926)が購入し、やはり煎茶会などで使用されていたと

推測できるものですが、形の異なる台が複数付属している石もあり、置き方によって変化する多様な姿が石の鑑賞のポイントであったことが確認できます。

清末の中国でも奇石図の制作は盛んですが、特に、つややかな光沢を持つ続本に、濃淡の微妙な変化が美しい水墨で染め上げるように石を描く胡遠(1823-86)筆「洞天一品図」(1878年、大阪市立美術館蔵、図7)☆は、倪元璐(1593-1644)筆「文石図」(1636年、同前)のような明末奇石図の影響力の強さを物語っていて注目されます。この作品は日本の漢学者長尾雨山(1864-1942)の愛蔵品でした。雨山は米万鍾を慕って「石隠」と号するほどの愛石家でした。蒲華(1830-1911)筆「雲根図」(1907年、大阪市立美術館蔵)☆は、雨山主催の奇石の会に際して制作されたものです。同じく雨山旧蔵の、小栗秋琴筆「倪元璐画石図」(1910年、京都国立博物館蔵)☆は、秋琴が杭州で得た倪元璐の画石図巻の模写ですが、倪の原跋の写しを含めて3度にわたって跋を書いている雨山の、明末画石図に対する愛着を伝える作品でもあります。

以上、ごく断片的ではありますが、豊穣な愛石文化世界における日中の文雅の交流を紹介してきました。作品上に表された石には、それぞれ制作者の美意識やこだわりが反映されています。本展では、愛石趣味という角度からも鑑賞を楽しんでいただければ幸いです。

(植松瑞希)

図1 芙蓉石四面図(部分)



図2 黄檗諸僧詠武夷石詩(部分)



図3 蘭石図屏風

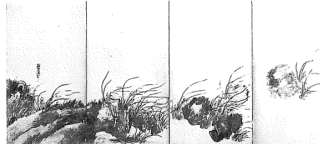


図4 翰墨隨身帖(第4図) 図5(第2図)

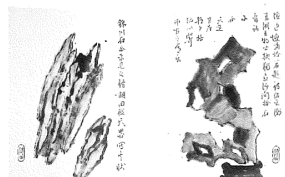
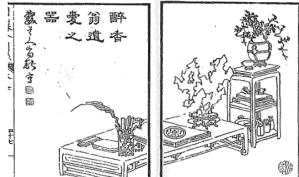


図6 円山勝会図録



季刊 美のたより No.181

平成25年 1月6日

発行 大和文華館